

「吉野材の道具」デザインコンペ

「割り鉛筆」最優秀

県が主催する、「吉野材」を使った「暮らしの道具」デザインコンペで、東京のプロダクトデザイナー



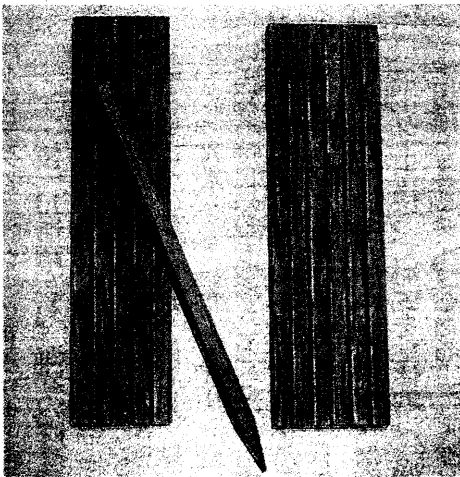
吉富寛基さん

1、吉富寛基さん(30)の「割り鉛筆」が最優秀賞に選ばれた。割り箸のように割って使うアイデアだ。

木目が密で美しい吉野杉や吉野檜の優れた特徴を生かした商品を開発し、需要開拓に結びつけたいと、県が昨春秋に初めて作品を募集。全国から219点が寄

せられた。3月の予定だった最終審査会は東日本大震災の影響で延期され、今日13日、東京都港区虎ノ門の「森カフェ」で開かれた。最終審査会では、15点の製作者が3分ずつプレゼンを行い、日経デザイン編集長の下川一哉さんら審査員7人が「現代生活へのマッチ」「奈良県の精神性」など5項目で評価した。

「割り鉛筆」は杉製の鉛筆5、6本が1組になり、吉野特産の割り箸のように手で割って使う。吉富さん



◎最優秀賞の「割り鉛筆」 ◎優秀賞に選ばれた「そよそよと風に揺らぐ一輪挿し」

は「割り箸という日本文化と、慣れ親しんだ鉛筆という道具同士を組み合わせ、『良き道具』とは何かを振り返るきっかけにしたい」と考え、吉野町の木工工房で製作したという。

「多くの人が手にするという商品化を意識した。マイ箸や樹脂製の箸が『エコの箸』と言われているが、日本の林業と結びついた国産割り箸こそがエコの箸と思っている」と話した。

優秀賞は全部で4点。東京都の大塚聡さんと三浦寛滋さんの「そよそよと風に揺らぐ一輪挿し」は、重心を低くし、底を曲面にして風でゆらゆら揺れる仕組み。ほかは、千葉県の斎藤信吾さんの「木目を生かした皿」、滋賀県の南政宏さんの「吉野杉のランチョンボード」、福岡県の平瀬祐子さんの「折りたたみ式のツール」。県は今後、入賞作の商品化を進める方針。(神野武美)